

もり
大 森 勝 夫 の 音
おと
信たより

第4回定例会の報告 平成二十一年 12月議会



以前はこんな大雪の朝も... 平成16年12月30日撮影

みなさんこんにちは 大森勝夫です。
長期予報で暖冬といわれても、やはり真冬の時期の寒さは厳しいもの。この時期に温暖で、異常気象ではないかと心配するよりは、冬だから冬の寒い寒さでよし、寒くてよかったと感謝すべきなのかもしれません。
寒い冬を乗り越えるから、春の喜びがある。厳しい時代を乗り越えて、次の時代が来る。だからこそ、小さな進歩でも、喜びは大きく感じられる。
千里の道も一歩から。小さな前進を、未来の飛躍へとつなげるため、広い視野をもった発想が必要な時代なのではないでしょうか。

大子町文化福祉会館への期待

平成22年4月中旬にオープン予定

仮称で呼ばれ続けていた名称が、「大子町文化福祉会館」と決定しました。愛称は一般公募し、379件にのぼる応募の中から選考作業が進められています。応募総数からも、施設への関心と期待の高さが伺えます。

オープンは4月16日の予定。なにより楽しみなのは、学校行事での発表会や、町民の趣味の会などの発表が、本格的なホールで気軽にできるようになることです。それにより、物事への取り組み姿勢がいつそう真剣になるでしょう。子供達の練習が本気になる、町民の趣味の活動が活発になる、生活に彩が加わる、そういった効果を期待しています。

商店街の活性化のきっかけに活用できないか

大子町文化福祉会館は、大子駅に近く、大子の商店街の中に建設されます。人を呼び寄せることができる施設になれば、商店街の歩行者も増えるでしょう。施設のオープンは活気ある街を実現できる可能性を秘めています。そのためにも、町外からも来館者が訪れるようなしがいが必要になります。

水郡線に乗って来館した町外の方が商店街を利用し、町の観光スポットへと移動する。それが実現すれば、商店街の客数も増え、バ

スやタクシーの利用促進も図れます。

では、人を呼び寄せることのできるしがい、何があるのか。ひとつには施設の性格上、芸術性を高めることが挙げられると思います。名の通った芸術家の作品を置き、施設と芸術家のイメージが重なり合うようになれば、国内からも来館者が訪れる施設に昇華するかもしれません。

大子町には、ドイツ人の陶芸家がいいます。国内にファンも多く、また、母国ドイツにおいても日本で活躍する陶芸家として知られ、ドイツ首相が来日の際には晩餐会に招かれるほどの国際的な知名度があります。そうした方に協力を依頼することも大切だと思います。芸術活動は経済活動ではありません。芸術は尊重すべきもの。大子町在住の陶芸家を応援することは、町の活性化につながるのではないのでしょうか。(常陸大宮市でもオカリナ奏者を応援している実例があります)

陶芸家の作品は、湯の里大橋や生瀬へ行くトンネルにもあり、施設から回遊する提案をすれば、新たな観光ルートの構築も可能です。今の大子町には、何か光り輝くものが欲しい、太陽のように力強い何かがある。そう感じる町民は多いはず。奇しくも、陶芸家は太陽をイメージした作品が有名です。町が探し求めていた太陽を、作品は象徴していたのかも知

れません。

大子町文化福祉会館は、町民の福祉と文化向上のため活用促進をはかり、町と商店街活性化のため、町外からの来館者の集客作戦を練る。そうした2つの明確な目標を掲げて運営すべきではないでしょうか。

子育て支援住宅の役割

町外転出の若者よ、帰ってきておくれ

袋田に町営の子育て支援住宅が完成します。袋田駅にも近いので、水郡線を利用しての通勤には便利な住宅です。

少子化にストップをかけるには、まず、若者に住んでもらわなくてはなりません。就労の場が少ない町に住んでもらうためには、通勤に便利な、賃貸住宅の整備が必要です。

また、高齢化問題の面でも、後継者が町内に在住してもらえれば、親にとって、将来の介護への不安も和らぎます。

通勤の利便地へ町営住宅を整備することは、諸問題に効果的に作用し、町の将来を安定化させるための投資と戦略なのです。

そして、一番大切なことは、なるべく若者が町外に住まないよう、大子に帰ってきてもらえるよう、声を掛け合うことなのです。

「仕事に通える所に町営住宅ができたから、さんちの御孫さん、大子に帰ってきて住んでもらうといんじゃない。」などと、「こ近

所や親戚とうしで、該当する若者情報を交換しながら、大子町への帰郷を勧めてみるのが効果的なのです。また、そうした会話から得られる、生の声からの問題点が大切なヒントになり、それを次の改善の課題にすることで、継続的な若者帰郷作戦（出て行かない作戦）が実施可能になるのです。

町営住宅のプランニングに

新たな発想が必要なのではないか

現在の町営住宅は、設計プランを公募し、建てる棟数の案を採用しています。同じ住宅がひとつも無く個性的ともいえませんが、同じ家賃で住環境が異なってしまう状況は疑問を感じます。住む人が設計プランを選択するわけではないので、間取りが全部異なる町営住宅では、不公平感が生じないのか心配です。

一団の敷地から計画できる町営住宅は、街づくりの観点からの計画が可能です。居住者の駐車スペースをひとつにまとめ、住宅の配置を工夫し、庭部分をまとめるように計画すれば、共通の広大な庭空間をつくることも可能になります。車も進入しない、住民のための公園のような庭が可能になります。

子育て支援の町営住宅であれば、そうした計画された住宅街を提供することも行政の責務ではないのでしょうか。ばらばらな町並みは、自由なようで、快適さと統一美への可能性を放棄しているように思えてなりません。

働く場を守ってほしい

第5次大子町総合計画の基本構想

10年毎の町の基本計画が策定されました。各分野にわたり、現状を分析し、目標を立て、実行すべき戦略案を立てています。

バランスよく計画案がまとめられています。なかでも最も力を入れなくてはならない分野は、就労の確保の分野だと思っています。働く場所がなくては、若者の在住はおろか、一般町民すら住めなくなり、人口減少を加速させてしまいます。そうなれば、商業などの経済圏の崩壊、税収の悪化、福祉の低下などの悪循環を生み出してしまいます。

新たな企業誘致が困難であれば、今ある事業所を守る手段を講じることも、就労の場の確保になります。個人商店でも農家でも、臨時のアルバイトが一人でも二人でも雇える状況になれば、雇用の発生になるのです。

つくば市との交流や大学との連携を活用し、経営のヒントや嗜好の変化など、現状に即した情報を町の商人へ提供することも、大きな支援策であり、就労対策だと思つのです。

企業誘致が無理だから、就労確保の分野はそつとしておこうという姿勢ではなく、積極的な姿勢と、発想の転換こそ必要な分野ではないのでしょうか。

大子町議会議員

大森 勝夫

